
リアル・・・こっくりさん

カービー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リアル・・・「ひくじさん

【NNコード】

N6285A

【作者名】

カービー

【あらすじ】

橋本翔、富本明奈、佐藤光、石田真理の仲良し4人組は翔の小屋に古くから置いてあつた「こつくりさん」を遊び半分で始める。だが、こつくりさんを始めたことにより……4人は最悪な危機へと向かい入れられることになる。

プロローグ

全ての始まりわ

僕たちが始めてしまった

学校の屋上で行われる

うつへつさん

今は「うつへつさんブームじゃないが

盛り上げるためにしてしまった

そこから全ては始まつた

第1話・「運命の始まり」

俺の名前は橋本 翔ハシモト ショウ

今年高校2年生になる。

今は春休み……。

学校はもあとすこしで始まる。

「翔一君！」

後ろから驚かしてきたのは俺の女友達「宮本 明奈」（ミヤモト アキナ）だった……。

「何でいるんだろうよー！」

俺はビックリした……怖い小説を本屋で立ち読みしていたから。

「それは、あたしのセリフだよー、あんまり暇かつたから来ただけ、何よんでもるのー？あ、こっくらさん！あたしもスキーワクワクするね

そんな明奈を見た俺は……いいことを思いついた。

「さうだ！一緒にゴックリさんやらねえ？」

明奈も俺の誘いにのつてくれた。

「いいよいいよ……でもさ、するなら大勢でした方が良くなーい？」

そこで何人か誘つてみた。

「2人くらい誘つたーぐるつてさー。」

俺がそういうと明奈は楽しそうにしている。

「あー俺さ、この前家の小屋で変なの見付けたんだよ、でも、暗くて見えなかつたから放置したんだけどさ、アイツ等来たら、俺の家ついてきてくれない？」

「いーよいーよー。」

明奈の顔はとても嬉しそう……。

怪談とか、そういう系の話がすきなんだねー。

「翔ー！ ヤツホ！」

佐藤 サトウ ヒカル と 石田 イシタ マリ 真理が来てくれた。

明奈が事情を説明する。

「ほんじゃ、小屋に行こつか！」

そう言つて着いた小屋。

「あ、あつたあつた！」

俺は見付けた本を手に取る、明奈と光と真理もホコリを吐いてくれた。

本の題名は……偶然にも

“ いっくさん ”

「 いっくさん 」

俺と明奈と光と真理は一時に声を出した。

しかも「 いっくさん 」の本は今現在出版されているのではなく、結構古い。

本を開いてみると「 ロックリ ss an の遊び方 」などと書いてある。

次のページをめくってみると「 あなた達の役目は終わりました 」と
出るまで、毎日、毎日「 ロックリ ss an をしなくてはいけないと…… 」
俺達は笑った。

だって、こんなのがウソこきまつてるもん。

そう思っていたのに……。

それはウソじゃなかつたんだ。

「 いっくさん 」

本を読むだけで終わればよかつたのに……。

俺たちは、馬鹿なチャレンジャーだから、じつは……。

運命をかえるとむしりずっと

第2話・「招かれた図書室」

「ねね、おもしろがうーー」ハハハとしてみよつよ

先に言いだしたのは、真理だ……。

「おもしれーー！俺、こうこうのスキかも」

次に言い出したのは光。

俺と、明奈は同じタイミングで

「決定！」

と口にした。

誰かが止めていればよかつたものの……。

「何処でする？」

俺は興味津々で聞いてみた。

すると、明奈が本をハンカチで拭きながら……

「学校は？」

迫力あるなあ！学校！いいかも、面白そうだし。

「ほんじや、夜に集合なー！」

光は、人一倍怖いのが好きな男……。

それに、明奈も真理も乗つて

夜に「じつくり s a n」をやることになつたんだ。

時間は9時・・学校の校門前に集合。

夜……俺たちは、校門前に集まつた。

「じつくりさんでキドキするね」

楽しそうにしてごる、真理と明奈。

そして、今……校門の前が開かれる。

「何処の教室ですか？」

真つ暗の中へ、仲間があんまり見えないまま俺は皆に聞いた。

「つてか、皆いるかよ?返事しろー!翔います」

すみと……

「明奈います!」

「光います!」

「真理いま一つす！」

。だいじめの二話ひ、さいじい

「つてか、まだはじまってないんだしさ、ただの誤魔化しだつて、じっくりさんなんているわけないし」

明奈はコツクリさんを馬鹿にする。

真っ直ぐいつて着いた場所は

文書室

「図書室」こわー

俺達はびくびくしながら中に入る。

つてか、何で開いてるんだ？

まるで「コツクリさん」が招待したような……そんな感じだつた。

第3話・「あなたは誰ですか？」

「早くじゅうよおー。」

明奈はやつぱり、「「」」からページ変なだけば紙真っ白で破る

「あれ?まつて「」」から「」」の本を開く。
か破り立つ真っ白で紙真っ白で破る
線があるー。」

俺と、光と真理はのぞき込んだ。

俺はひらめいたーといつか……「」」

「これって……」」の紙に「」」書かなくつけないんだよ
ー多分、ってか、説明書読めば早いじゃん!誰か読んでよ」

俺は結構人任せにしてしまった。

すると、光が読み出した。

「「」」の仕方」

「あ～んまで書いて、点々と丸を書いて、数字を書き、はいといい
えを書いて神社の鳥居を書いたら完成、そのさいに、鉛筆か、1
0円玉を用意して下さい。紙は、本の紙に真っ白な紙が何十枚もあ
ると想いますが、それをお使いになつて結構です。

注意：絶対に、10円か鉛筆を話さないで下さい。

途中で話すと呪われます。

「コックリさんをするやつには低靈がよいつまますので、ちゃんと、
追い払つて下さい。

決まり：一日一枚その紙を使って下さい、全部終わるまで、この本
から出るコックリさんからは逃れられません。

途中で逃げ出したりすると、死の恐れがありますので、始めた時は、ちゃんと、ページの最後までするよつとしてください」

俺は一人でおびえだした。

「一日一枚とかイヤだし！ やつぱみやめよつよ」

でも、真理と明奈と光は勝手に話しを進めていた。

俺が言いだしたんだ、俺が逃げる訳にはいかない……。

そう思い、俺もする」とになつた。

「毎日コックリさんできるとか楽しみー」

明奈と真理は一人ではしゃいでいる。

光は、紙に書き始めた

すると、いきなり紙が光り出した。

日付が現れた・。

GAMESTART!

「すつ」——！本格的……私、ゴックリさんズット前したけど、こんな本格的なの始めて」

真理は興奮している。

俺はイヤイヤながら参加している。

イヤだな

一 書き終えた！」

光は、
綺麗に書き終えている。

鉛筆が近くにあつた。

鉛筆でするしかなしな……

俺は光に鉛筆をわたした

卷之三

備達は鉛筆を握る

反応がない

俺たちはせーのと並び反応でまたコックリさんに聞く

「おいでになられましたら「ハイ」の方向へ言つてください

反応がない。

「あれー居ないじゃん、なんでえ?」

真理は俺たちにムスッとした顔をする。

ページはズット光っている。

「じりねーよ

俺は、早くやめたいとこつ気持ちが強かつた。

「もう少ししまつてみよつよ

落ち着いた調子で言い出したのは明奈。

すると・・鉛筆が.....。

ズズズズズズ.....。

動いた「はい」の方向へ行く。

「キヤアアア！怖い！」

騒いだのは真理だった

「うつせえよ、静かにしろ！俺が聞く！」

そう言い出したのは光。

「あなたは誰ですか？」

第4話・「辽介から来た返事」

”あなたはだれですか？”

「反応がない……。

皆は黙り込む。

「何で反応ないんだ？」

俺はぼそっと聞く。

「分かったー！誰か動かしたでしょ！誰？明奈？光？翔？」

皆は一緒に……

「動かしてなーいっつーー！」

と答えた

辽介さんが最初に動いてから10分が経過した。

「もう、帰ったんじゃないの？」

落ち着いている明奈が言い出した……。

明奈が辽介と、なんとか、もう帰ったのかと言ひ感じに思えてくる。

そのとき。

”わたしはこつくりさんです”

「ぐりさんか俺たちに返事をしたのな。

「やめなあじゃーん!!」

真理が残念そうに詫う

「じゃ、今度は私が聞いて良い?」

明奈が口を開いた。

卷之二

俺と、真理と光は一緒に言った。

聞く前に”じつくりさん”が動き出した。

ズズズズズズズズ
.....。

おまえたちは絶対途中で

泊まってしまった。

何が言いたかつたんだ？

あると明奈が……

「何がおっしゃりたいんですか？」

と聞きました。

「反応がない。

「怖いんだだけ……。」

真理は震える声で叫び出す

「それは嘘一縷だ……。」

光が真理にさしつかづく。

あいつは嘘怖くて溜まらないんだ。

光の言つとおり嘘怖いんだ……。

叫ぶ。

やつと動を止めた。

「」つくりやんをやめようとする

え？

何なんだ……。

「やめねえし！」

光は強い口調で言つた。

つていうか……「やめるじゃなくて、やめよつとする」つて事は、
ゴックリさんからは「にげられない」と「つ」とだ。

真理が突然変な事を「つ」くりさんに聞いた

「私達は、無事家に帰れますか？」

すると

ズズズズズズ……。

「おまえはかえれない」

「つ」くり」とだ？

真理は帰れない……。

第5話：「」のくわんのイタズラ

真理は啞然としている。

「…………だれよお！ こんなデマしてゐるの？」

真理は明るく笑う。

でも、俺たちの表情は真剣だった。

光がコックリさんには聞く。

「何で真理だけ帰れなしんでですか？教えて下さい」

じいじやんはついでに動始めた

ススズスススス
.....。

それはおしゃれない

真理はどの辺を始めた。

「謹むー！ ハッカラちゃんが見ていいだしたのー！」

俺
で
す。

「もう、こわいよー 今田の所は……」

明奈が言いかけた時……。

「かえらない」

え? どうして? うるさいだ?

俺はコツクリさんにおもいきつて聞いてみる。

「何でかえさないんですか？」

て こ
や う
る な
つ た
ら み
ん な
か え
さ な
く し

アーヘンの二ノ川だ。……。

さすがの光もおびえだした。

「うつぐわさん、今日の所は帰つて下さい！お願いします、帰つて下さるならば「はい」の方へ移動してください

するといつもくつろぎながら、おじめた。

ズズズズズズ
.....。

「はい」

なんだ、かえれるじやん！よかつたー終わつた！

そう言つて脚はぱッと手を離す。

明奈が先に図書室のドアを開ける。

「あれ？開かない……開かないよ！」

「は？ひょっとしてよ！俺達は全員で開けに行く。

「開かない……誰も閉めにこなつたよな？」

「俺たちは、『ツクリさんから』逃れられない”

叫んでも誰も来ない。

わ、……ひくつさんなんて、したくない……。

「閉じこめられたのー！？」

真理はまた泣き出した。

「大丈夫だつて！」

光が真理を心配する。

本当……どうにもできない。

^ ^ ポツン ^ ^

あれ？何か降ってきた？

「あれ？雨漏れ？」

^ ^ ザアアアアアア . . . < <

「ちょっと何雨漏れひどすぎー。」

図書室に水が溜まつていく。

びりかしななくなり。

窓開けろ！」

俺と光は窓を頑張って開ける……が開かない。

なんでだよ！あ……携帯！

ブルルルルル
.....。

皆の携帯が一聲になる。

誰からかかってきているか見ていて。

4人とも一緒にタイミングで声をあげた。

着信は
。.

「スケルトン」

第6話：「恐怖の試練」

「ね……ねえー、アーヴィング君。」

心配そうに鳴る携帯を見て咳く真理。

俺たちも震える手で
たた携帯を見一めぬ

誰もかかれない、としない。

図書室は水が溜まると

と云ふのは「和達」は居たる死んじやう!」

慌てる明奈、
真理も涙が止まらない。

俺も気持ちが焦る。

また「いぐりさんから」の着信は鳴っていません。

「誰が出てよー！」

明奈は震える声で畠に詫ひ。

「もう俺が出る！」

そう言い出したのが光

【ガチャツ】

「はー、もしもし」

向ひから声は聞こえない。

「もしもし……」

みると、とても高い声で……。

「何で、帰つてつていの、もつと話したかったのに」

もうひん俺たちにも”じつべつせん”の声は聞こえる。

「え……」

光は言葉に詰まつてゐる。

「返わなつよ……家には返わなつ、さつするの?水はたまつてゐるよ?
?」

皆疎然としている。

怖い……。

それより俺は一生懸命ガラスを割る。

でも割れない。

光は怖くて電話を切つてしまつた。

するとまた……。

＾＾フルルルルルルルルル

4人の携帯にかかる。

真理は泣きながら言い出した

「もつ……ヤダ！私携帯いらない！」

続いて明奈も震える声で

「あ、あたしも」

でも、やつぱり水に携帯を落とすことができなかつたようだ。

＾＾フルルルルルルルルル

携帯は鳴りやまない。

電源を切つてもかかる。

「何で……かかるてくれないの」

そつ、かかるつてないのに、元のものは、いつくつたこ、の声

「なんで聞こえるの？」

真理はおびえながら聞く。

周りは水が溜まる音しかしない。

「うくうく」の声は携帯から聞こえる……。

俺たちは一せーので携帯を開いて画面を見た。

俺たちの皿に飛び込んできたのは……。

”うくうく”

第7話…「なんなんだよ、いのゲーム」

「わああああー」

全員震える声で携帯を水に落とす。

水は腰まで溜まつてきている。

”いっくつわん”

その素顔があまりに怖くて、俺も涙が出てきた。

血まみれの顔で、人形みたいな顔をしている。

目が縁ぐで、顔の色は青ざめている。

いっくつわんの髪は長い……。

そして、顔から下がない。

つまり、首も含めて肩とかがないのだ。

水に落としても、いっくつわんは喋り続ける。

「生きたいなら、終わらせて……私を消して……。」

俺達は肩が震えて何も言えない。

「ねえ、以前にもコレやった人居るけど、途中で逃げたよ……。

逃がれなくなつてしまひ、血を吸つてしまつたよ、笑えるね

「ひへつたよな高こ声で喋り続け。

「返事しないよ、わざわざやつよ

やつはつて図書室のドアが「ノン」となる。

ハハハハハハハハハハハハ

「わざわざやつよ

真理は顔が青あゆつて、自殺しそうな勢いで叫んだ。

当然俺たちも……青あゆつてる。

「来たよ……」

ドアの向ひから聞こえるのはいつへつかんの声……。

真理は氣絶しそうな感じで血田になつてゐる。

それもそうだ、ひへつたよが来るなんよ……。

開けたくない……またくない、皆だひへつたよ。

明奈と光は怖いのか田をつむつてゐる。

「あけよ

ドアの向こうから聞こえてくるのは「ひへつねえ」の声……

「こやあああー」

勢いで明奈が叫んでしまった。

その瞬間ひへつさんが、ドアを開けて入ってきた……。

ひへつさん、携帯のひへつさんと同じだ。

ひへつさんは不気味な笑いをしている。

「首……がないよ」

光が震える声で囁く。

ひへつさんは……首がない、その顔は血まみれだ。

「あやああああー」

明奈が連れて行かれ。

俺たちはひへつさんに何処かへ連れて行かれてしまった。

「明奈ーー。」

明奈はひへつさんに何処かへ連れて行かれてしまった。

なんなんだよ……」のゲーム。

第8話・「恐怖の明奈」

どんなに叫んでも明奈の声は聞こえなかつた。

ドアも開かない……。

ただ聞こえるのは「うくつわ」との笑い声。

その時……。

ドンドン水が引いていく。

「あ、水がなくなつていく」

真理は泣きながら引いていく水を見つめる。

オレは何がなにやうだ。

光はボー然と立ちつくしている。

水はなくなり、オレと真理と光はドアを開けた。

その時……大きな鏡が出てきた。

え? こりは、入り口じやなかつたか?

何で鏡になつてるんだ?

その時……。

「翔
.....
真理
.....
光
.....
」

聞こえたのは明奈の声。

俺たちは急いで後ろを振り向く。

……だが明奈は居ない。

俺たちは鏡を再び見る

そこに映っていたのは明奈だった。

血まみれで……目が緑くて顔は青ざめて、田から血をだしている、もちろん顔から下がない

何でこんな姿の明奈か……。

鏡に映っている明奈はすぐに消えてしまった。

真理は口を開く。

「うへへつれん、うへへつれん……もし居るなりば答えてください」

こきなつひかべつさんひ動ね始めた。

だが、反応はない。

「明奈をどうするんですか……」

光が次に口を開いた。

するとい。

「河原……。」

「うへりさんのはこの言葉を書いて消えてしました。

鏡もなくなつて入り口になつたのですぐ河原に向かつた。

俺たちの田にとびこんできたのは……。

血まみれで倒れている明奈だった。

俺と光と真理は明奈を起こす。

「明奈……明奈……」

だけど、明奈はぐつたりした状態。

真理はすぐ脈があるかどうかを確かめる。

光は息をしているのかを確かめる。

「大丈夫、気絶してるだけ」

光はホッとしたような感じで言った。

「けど」の血は何なんだ……？

服の中も血でグツシヨリ濡れていたから真理が明奈の服を脱がしている。

俺と光は恥ずかしさなんて、もうどうでも良かつた。

明奈のお腹には赤い血で大きく

「今度はお前の番だ」

と書いてある。

次の瞬間……。

明奈は皿を開けて白皿で俺たちを見る。

「 わやあああー！」

一番最初に叫んだのは真理。

「 今度はお前の番だ」

明奈はそう言って皿を閉じてまた気絶してしまった。

” 今度はお前の番だ”

第9話・「怒りの死」

今度は誰の番なんだ。

俺と光と真理は多分その事が頭から離れないだろ。

1時間後明奈が田を覚ました。

「明奈……」

真理が泣いて抱きつぶ。

明奈はボーゼンとしてこるがすぐに周りを見渡す。

「あ……私どうして」

全然状況が読めてない様子。

それもそうだ……。

光が今までの事を全部説明すると明奈は泣き出した。

「そんな、迷惑かけて」めぐなさー

俺は明奈を励ました。

「明奈のせいじゃないから」

俺たちは今日は解散した。

皆の身に何もないことを無事に祈り。

「つくりさんの本は俺が持つことになった為、不安がたまらない……。
……。

あ、そういえば、明日クラス会があるんだ……。

そう、クラスがもう変わってしまうから、最後にクラス会がある。

次の日

俺と真理と明奈と光4人揃つて学校に行く。

クラス会と…… つくりさんをやらなければいけないから。

クラスの皆が教室に集まつて菓子とかを広げ始めた。

さすがに俺たち4人はげつそりきている……。

その時

「キヤアアアアア！」

クラスの女子が叫んできた。

「屋上に……」

俺たちはすぐにかきつけた。

そこには、一人の男子生徒が血まみれで倒れている。

やつぱり、俺たちの予想は当たった。

” いっくわさん ”

光は息があるか、心臓は動いているか確かめている。

「いやああああ

真理は座り込んで大泣きしてしまった。

「真理、私も悲しいのよ、でも……」

頑張つて励ます明奈。

俺は……ただボーゼンと立けぬへすしかなかつた。

「違つの」

真理は明奈の服を強引に引っ張つた。

明奈はビックリしている。

俺も、そんな真理を見てびっくりした。

何が違うんだ？

「血まみれで、倒れている人私の好きな人だったの

え……！

俺と明奈は何も言えない。

光が大声で俺たちに叫ぶ。

「駄目、息ない……死んでる」

え……？

死んでる？

だって明奈は死ななかつた。

なのに何で……。

” いつもさん、あなたは何を考えてるんですか ”

第10話：「ijjくつさんとの復讐」

明奈が涙を拭いて俺たちに口を開く。

「ねえ……ijjくつさんしょりよ。」

光も頷いた、俺は正直迷っている……真理はズット下を向いたままだ

その時

››プルルルルルルルル……<<

また4人の携帯がなり始める。

次は光が電話に出た。

「……何ですか」

すると、ijjくつさんの先程の怒った声は無く、高いいつもの声だった。

「何してるの？ 何でズット真理はそこに座ってるの？」

真理は体事ピクッと動いた。

俺たちにも緊張が走る。

「今からじょりうと思つてたんです

光がそうこうと「ラクさんはグズグズと言わせ始めた。

泣いてるのか？

「早くしてって、どうなっても知らないよ？」

「うううさんは泣いてるは笑つてはるのか分からぬ。

俺たちはただ「うううさんの言葉をジット聞くしかなかつた。

「もつ……やめたいです、イヤです」

光がいきなり泣きながら「うううさん」と言つ出した。

そつすると電話がいきなり切れた。

やめられるのかな？

そんなどすないのに……

少しでもやう思つてしまつた。

すると次の瞬間

「おえ……」

光がいきなり口から大量の血を吐き出した。

「光！」

「どうした事だよ……また『ツクリさん』なのか？」

俺は走って『ツクリさん』の本を持ってきた。

「ツクリさんの本を壁上に広げようとする。

でも開かない……。

「あれ……開かない」

俺は、おもいつきり本を広げようとするが鍵がかかってるみたいに本は強く閉じられている。

明奈手伝ってくれた……がやはり開かない。

一番最初に『ツクリさん』をした場所は図書室。

図書室に行けば良いのか？

やつ思つて俺は階に図書室に行くように指示した。

光も運んで図書室に向かった。

図書室に足を運ぶ……だが、気があまり進まない

光の血は少し止まりはじめた。

一体なんだつたんだ？

そう思いながら本を開ける。

「開いた！！」

真理は嫌な顔で言つた。

殺される……。 できれば開いてほしくなかつたが、やらないと

俺たちはこつくりさんを書いていく。
日付も表示された

皆は一本の鉛筆を握る。……。

「ぐりさんは動き出した

.....

「まだ何も“はい”の方向に書いて下さって言つてないのに」

明奈が不安そうに俺たちに言つ。

もう、俺たちがワザト動かしていいなんて思えれない。

俺たちは、こつくりさんを見てしまったんだから。

「ひへりさんが本当に存在している……。」

そう思つと涙が出るほど怖い。

”なにやつてたの”

真理は好きな人を殺された悲しみから口を開いて叫んだ。

「何で殺したりするのよ……何でよー。」

するとひへりさんはまた動き始めた。

ズズズズズズズズ……。

”おまえたちがしないからだ”

俺たちは「ツクさんの行動にイライラが増す。

「光を治してよー 光を治してよー」

明奈も泣きながらひへりさんと叫ぶ。

ズズズズズズズズ……

”きがむいたら”

俺はついにぶち切れてしまった。

「何が気が向いたらだよー早く治せー。」

ズズズズズズ……

”きょううはこれでおわりにする”

俺たちは怒りが積もつていた。

あまりのこっくつさんの発言と行動に胃が潰れそうだ。

「帰るなら”はい”の方向へ行かれてください」

俺はムスつとしたような感じで言つた。

すると。

ズズズズズズ……。

再び鉛筆が動き始めた。

え、何でだ！？

”こんどはおまえだ”

そしてこっくつさんはゆつくりと”はい”の方へ進んだ。

俺たちは不安と怖さと怒りで終わつた後も何も言えない。

すると物音が激しく聞こえる。

>>ガガガガガガ……<<

そして勢いよく校舎が揺れ始めた。

停電し、俺たちは不安感に襲われる。

するとの時……

図書室の全部の窓に赤く血がついた手が満面に広がっていた。

第1-1話：「消えない憎しみ」

俺たちは一步も動くことができなかつた。

怖い……。

何で恋に赤い血がついた手が何個もあるんだよ。

手から下が無いのかな？

やつ思つて俺は恋の下をのぞき込んだ。

「翔一何やつてんの、危なによ

明奈は俺を心配してくれる。

俺は暗くて良く見えなかつたので、やついつかいつぞき込む。

すると

いつもさとの顔がすぐ田に入つた。

「ウワアアアー！」

俺は叫び見るのをやめて後ずさつしてしまつた。

何でいつもさと……手があるんだよ。

顔だけだつたじゃないか？

ずっと顔だけだとおもつていたのに……。

俺は勇気を振り絞つて、赤く血がついた手が全体にある窓をもつ一度見渡した。

そしてもう一回下を見てみる。

じつくりさんの姿はなかつた。

でも……」の窓全体に何個もある手はなんだ?

「へんじやないのか？」

そういう時

手が窓を突き抜けて真理の首を強く絞め始める

- 1 -

眞理は決してなかつてゐない體をおせつて、我らは其のへんを

残るの卅五年ノ事に付て、

俺たちの首を強く絞める

苦しそうだなあ！

もう、
イヤだ！

俺たち4人は首を絞められたままだ。

すると

明奈がつり上げられた状態に上に持ち上げられていた。

このままじゃ明奈が死ぬ！

「明……菜」

俺は苦しい首の痛さを押し殺し、聞こえるか聞こえないかの声を一生懸命出した。

本当に苦しい

この手の握力はいくつあるんだといふくらいに。

その時

誰かの遠い声で叫んでいるのが聞こえた。

「キヤアアアアアアア……」

俺たち4人は廊下の方を見た

廊下の方から聞こえてくるから

何故かだんだんこつくりさんの手の握力がなくなっていく。

あれ……？

明奈はドサッと倒れ込んでしまった。

真理も光も倒れ込んでいる。

「死ぬかと思った・・・」

光はゲホゲホと咳をして涙を流しながら歸て言つ。

俺も、死ぬかと思ったよ

明奈も何とか大丈夫そうだった。

俺たちはゆっくり顔をあげ血のついた窓を見る.....。

するとそこには。

こつくりさんの顔が映つていた。

俺たちは怖くて声も出ない。

「邪魔が入ったから今日はこれで終わりにしてあげる

」そつ言つて消えてしまった。

”邪魔が入った？”

俺は感づいて廊下の方へ猛ダッシュで走る。

「翔、ビニールのよーー！」

俺は真理の言葉を無視したまま廊下に出た

何故か窓につり下がっているのは女の子……

あれ、優！

優は確かに光の妹だ……。

「助けて！」

そう言われ、俺は優を助けようと思い手をだした……。

下を見てみると手が優の足を掴んでいる。

”死”へと連れて行こうとしているみたいだ。

”大切な人をこうしていく……”

「助けて……」

光の妹優は、震えた声で俺に助けを求める。

俺は図書室まで聞こえる大きな声で叫んだ。

「光ーー！」

すると光はすぐに廊下にやつてきた。

「どうし……」

光は言葉を言いかけて優を見る。

その場に固まってしまった。

明奈と真理も廊下に出できた。

「なにやつて……あれ？ 優ちゃん！」

真理は驚いた様子を見せてくる。

そりゃそうだ……。

光の妹が窓につり下がつてているんだから。

光は優の手を持ち引き上げながら涙を流す。

「何で……優……」

俺も優の腕を掴んで引き上げようとする。

だが、優の足に捕まつていて手が優を引っ張る。

優は泣きながら光に答えた。

「お母さんが戻つてこいつて言つてたから、迎えにきたの廊下歩いてたら窓の外からいきなりスルつて赤い血が染まつた

手が入ってきて私の髪を引っ張つて、窓の外から放り投げようとしたみたい……だから窓にぶら下がつて……」「

そういうと何を言つてゐるのかわからないような声で再び、おもいつきり泣き始めた。

俺たちも頑張つて優を引っ張り上げる。

するとその時優の体がいきなり重くなつた。

「おくりさんがぶら下がつていた。」

「何でこりくりさんか……」

真理が泣きながら俺に言う。

そんな事いわれたつて俺も知らねえよ。

その時……優との手が俺と光は離れてしまつた。

「優——！！！」

第1-2話：「悲しみから憎しみに」

俺たち4人はすぐに優が落下してしまった場所に行つた……。

優は頭を打ち付けたよつて、頭から血が出ている。

「優……優！」

光は泣きながら優の体を揺らす。

「そんなに、揺らしちゃダメ！ 翔……救急車呼んで！」

明奈は俺に怒鳴るように叫んだ。

俺はすぐ救急車を呼ぶ。

そして、30分後……。

救急車がやつてきた。

何があつたのか聞かれたが……言えない。

言つても信じてくれるはずないから。

俺たち4人は黙り込む。

時間がもつたといないからと言つてすぐに救急車の中に優を乗せて俺たちも乗り込んだ。

「優……」

光はずっと優の手を握り、呼びかける。

俺も優の手を握る。

どうか無事で！

すると、その時

4人の携帯が鳴り始めた。

♪♪プルルルルル……<<

俺たちの額には汗が流れる。

救急車は携帯の電源を切つてなくちゃけないから、全員切つたはずなのに……。

「どうする？ 取るの？」

そつこいつ真理に反論して俺は皆に携帯の電源を切るように指示した。

俺たちは携帯の電源を切る……。

だが何故かわからないけどかかるてくる。

「どうするの？ ズットかかって来るよー。」

明奈は心配そうに携帯を見る。

そして……電話の着信音が止まった。

俺たちはホットした……。

それより優だ。

優俺たちは無事であることを祈る。

そして何十分か後。

病院に到着した。

すぐ医者にみてもらったのだが。

俺たちに下された言葉は……。

「残念ながら、頭の打ち所が悪く……先程息をお引き取りました」

優が、死んだ？

うそだろ……。

俺たちはすぐ優の元に駆け寄った。

だが……田を覚ますことは無かった。

いろんなあんまりだろ

優が何した

教えてくれ、じつじつと

そして……御葬式。

俺たちは何も言ひとどができなかつた。

じつじつ……。

優がこんな。

俺たちの心を映すかのよひに涙が降つてきた。

でも、そのまま御葬式は続けられた。

俺は後ろを振り返った。

誰かが居る気配がしたから。

すみと……。

予想は的中。

黒い服に……。

血がついていない。

青ざめた顔。

それはこっくりさんだった……。

何で「？」。

俺は光と真理と明奈を小声で呼んだ。

3人は後ろを振り向く。

そして真理は……。

声を押し殺して泣き始めた。

光はこっくりさんを睨んでいる。

だけど、こっくりさんは笑っている。

許せない。

生きている中で一番許せないのはこっくりさん。

俺たち4人はズットそう思い続けるだろう。

第1-3話：「死にたくないよ」

「ひくりさん、 ひくじさん……

あなたは何を考えているのですか？

俺は……いや、 俺たちは……。

あなたが怖くてたまらない。

これ以上、 俺達の大切な人を奪わないで。

俺たちが何をした？

優がなにをした？

「ひくりさん……。

俺はいきなり気持ち悪くなつた。

静かにその場を後にした

うえ……つ

洗面所で吐いている俺。

すると……。

「次はお前の番だ」

「いつか聞こえた。

「いつかさんの声だつた。

鏡を見るといつかさんが映つていた。

いつかさんは赤い血の涙をながしていた。

“次はおれの番……？”

葬式が終わり俺は家に帰宅した。

「キヤアアアアアアア」

俺の家から母さんの悲鳴が聞こえた。

俺はすぐ家に入る。

なにがあつたんだ……。

そこに居たのは

“いつかさん”

母さんの首を髪の毛で絞めている。

なにやつてんだ！

ふざかんなよ。

(ヤメロ)

そつ思つて、そつそつさんは俺を睨んで赤い血を田から流し始める。

あるといつもそつさんは俺を睨んで赤い血を田から流し始める。

う……。

床を見てみると……。

赤い血がべつとつと流れでお風呂場まで続いている。

何で風呂場？

そつ思つて風呂場を開けると……。

姉が風呂場につかつたまま死んでいた。

そつ、お湯は赤い血にそまり、姉は全身赤い血で……。

そして鏡には……。

でっかく血で

”死”

とかいてあつた。

洗い場も血で染まつてゐる。

なんでこんな.....。

姉ちゃん！！

俺はおそるおそる姉ちゃんの入っているお湯に行つた。

すると「いや、どうせんが何故かお湯の下から生れました。

俺はビックリして腰を抜かしてしまった。

俺は泣きながら近づかないよう手を振り払う

憤
し
・
・
・
・

怖い！

死にたくないよ……。

第1-4話：「ソルベツカニの願」

「早くソルベツカニをしてみる……」

ソルベツカニをは低い声で言ふ俺の方に近づいてくる。

ソルベツカニしても意味無いじゃないか。

ソルベツカニじゃないか。

ソルベツカニをしつづけてたらとまつて思つてたの……。

してもしなくてもソルベツカニ……。

「ソルベツカニよ！俺たちを苦しめて何が楽しこんだよー。」

俺がソルベツカニ……。

玄関のチャイムの音がなる。

ソルベツカニボーンボーン

次は……。

次はなんだよ。

俺はおたるおたる玄関を開けてみた……。

ドアの向こうに居たのは、”明奈”だった。

何やってんだ、こんな所で。

「明奈

俺が明奈の名前を呼ぶと、明奈は俺に抱きついてきた。

な……。

何してんだ……。

「明奈、どうした？」

明奈はいきなり泣き出した。

妹が居なくなつたの……。

は？妹が？

「さつきまで居たのか？」

「うん……」

それじゃ、はぐれたのかも知れないな。

俺はいつも居るの方に振り向くと。

いつもさんが居ない。

な……。

「ひづきまで居たのに！」

何で居ないんだ……。

「ひづきまで居たのに……」

俺は声を震わせて言った。

だつて。

居たじやん。

何処に行つ……。

まさか！

「ひづきさん、明奈の妹の所かもしれない

明奈はビックリして倒れかけた。

明奈の顔は見る見るしづらさめていく。

大丈夫かよ？

すると二人の着信音が流れれる。

多分光達にも流れている。

光達がすぐ俺の家に来た。

真理は汗かくまらない状態だ。

「携帯……こつくりさんからだつたから」

光は俺の家の中をのぞき込んだ

一
血

光と真理は家中を見てびっくりしていた。

明奈も今氣づいたかのよう「ソラクリして」いる。

しきりもの光は……。

携帯から何処かへかけ始めた。

「もしもし、警察の方ですか？今殺人事件があつたんですね」

警察にかけ始めたのだ。

そして數十分喋り終え電話を切つた。

真理は光を怖い目で見て いる。

警察に電話しなきゃいけないことは皆わかつていたのだが……。

「ひくひさんを思ひと……。

電話できなかつたんだ。

俺は家に残り状況を警察に説明することになった。

明奈達は妹を探しに行つた。

俺は家の中で警察を待つていた。

すると……。

「グアアア」

外で男の人の叫び声が聞こえたので

すぐに出でみた。

え?

俺の目に入ったのは殺された警察官

何で……

まさか

「ひくひさん?

俺は当たりを見渡したがこいつらは居ない。

でも首にしめられた痕がある。

”邪魔するな” といつかのよつこ……。

第1-5話・「消えたら誰かが殺される」

怖い……。

俺は自分の部屋から「ひくじさん」の本をもつてきました。

この本があるから……。

こんな物いつそう捨ててしまえば。

俺はそう思ふ

”「ひくじさん」の本を持つて川に向かった。

捨ててしまえば……！

俺はそう思い「ひくじさんの本を川に投げ捨てた。

本は水の底に沈んでいく。

もつ

終わった。

そう思っていた瞬間。

「ひくじさんは怒つてこるよしだ。

」

顔は真っ赤で血が以上に流れている。

「お前、何で捨てた」

「ハハハさんは鋭い皿つきで俺を見る。

だつて、こんなあんまりじやないかー

ハハハさんの声は今までに聞いたことがないハハ。

低くてかすれていた……。

俺は即泣しながらハハハさんを睨いた。

「 もハやめたかった

ハハハさんの表情は見る見るハハに黒くなつていぐ。

焦げるかのように……。

「約束やぶるな」

ハハハさんは黒い肌の色で赤い血を皿から流した為とても怖く感じた。

「約束?」

何のハハだ

約束なんて……。

「一番最初言つただる……おまえたちはやめようとするつて
でも、お前の仲間は絶対やめないと言つた……嘘をついた」

「うう、くりさんが拾つてきた本は水でびしょびしょに濡れてい
る。」

「うう、くりさんはそれを自分の長い髪で拭きだした。

「こうなる事も知つて……やめないと言つたのだろう?」

そう言ってまた俺の方を睨みつける。

違う。

「うなること何てしらなかつた。」

しらなかつたんだ！

俺は首を横におもいつきり振った。

……消えるな！

消えたら誰かが殺される

”コロサレル”

第1-6話：「最後の手段」

俺は本をひらりって濡れている本を洋服で拭いた。

何でこんな……。

姉ちゃん、母さん……。

そう思つと涙が出てくる。

帰つてしまつよ！

俺はその場にうずくまつて泣いていた。

返せよ、俺の大切な人たちを……返せよ……！

次の瞬間

♪♪フルルルルル・・・♪

だ……誰だ！

「ひへりさん？」

おびえながら携帯を見てみると

『真理』

真理だった。

「どうしたんだ？」

「もしもし、真理？妹はどうなつ……」

「まだ見つかってないの、それよりテレビつけて！」

俺は真理から言われるがままにテレビをつけた。

ニュースが放送されている。

『「この数日で原因不明の死亡者が増えています……
原因は何なのか、警察は今……』

あれ？

画面が真っ暗になってしまった。

「真理？画面が真っ暗になったんだけど

「私も……」

^ ^ ッ プーブー ブー ^ ^

え？

電話が切れてしまった……

何で切れたんだ……

俺はすぐ真理に電話をしようと思い携帯の番号を押そうとした時。

>> プルルルルル <<

電話がかかってきた。

真理からかな？

着信は

『アーニング』

額に汗が流れる。

俺は電話をとった。

もしもし

「今すぐ放送をやめなさい。」

しかし、なんとしても低い声で怒鳴りつかる。

そんなの……。

— そんなの無理に決まって —

言いかけた瞬間

テレビの画面が元に戻った。

”謎の死亡者増加”

それについて語っている。

多分画面が消えたのは俺たち4人が見ているテレビだけだろう。

「早く放送をやめさせろ、さもないと」

「さもないと……。

なんだよーー?」

「「」のニュースキャスターを殺す

え?

まつて、なんだよそれ!

『「いつたいどうこう事なのかー……』

放送していたアナウンサーの綺麗なお姉さんが
いきなり苦しみ始めた。

自分の首に手をあてている。

まるで首を誰からつられているかのよつこ。

でも誰も映っていない。

俺たちにはすぐ分かつた……

「つくりさんが首を絞めていると。

アナウンサーの人は呼吸停止でその場に倒れた。

「つくりさんが殺してしまった。

いや……

”殺した”

アナウンサーのお姉さんは死んでいるはずなのに生きなり目を大きく開けて……

「終わらせろ」

そつ言つて再び息を引き取つた。

終わらせろ?

放送を終わらせろ?

それとも……

「つくりさんを終わらせろ?」

次は何があるのか。

怖い

考えただけでも身體いする。

俺もお前に言いたいよ。

人を殺すのは終わらせりて。

だつて、ここの酷あざる……。

びつせりたらとあいれるんだ……

本、捨てもひつせりたがひらりとへる。

水にながしても駄だ。

ひつせりさんをナイフで殺す……。

これも考えたがひつせりさんは瞬間移動ができる。

もう、本をどうにかするしかない。

本を

本を……燃やせば。

そうだ！燃やせばいいんだ！

燃やせば全部焦げる。

この本だって……

この本があるからいけないんだ。

俺はそう思い自分の部屋に戻つて机からライターを取り出す。

終わる……

これで終わる。

これで解放されるんだ。

なんの根拠もないのに俺はそう思つていた。

そようなりじつへつわ。

ゲームはおしまいだ。

››ボツ……バチバチ＜＜

本が燃えていく

もう全部終わる……

「何やつてん

本の前に現れたのは

”じつへつわ”

本はあるあるひに燃えてこぐ。

「ひくつさんは全部燃え尽きた前でページを一枚破った。

な、何するんだ！！

まあ良い

ページを何枚破るがもつ終わるんだ。

この本事態なれば。

「うう……ウウウウウウ」

「ひくつさんは苦しみ始めた。

次の瞬間……一瞬で田の井を片方落とした。

消えていくのか？

「ひくつさんが滅びるのか？」

「ひくつさんは俺を悲しい田で見る。

「ウアアアアアアアア……」

「ひくつさんは壊れていく。

かよひなひひくつれこ

ゲームとても楽しかったよ

何人も殺しやがって。

……どうもアリガトウ

橋本 翔

こつくりさんを絶対許さない事を誓います。

これからも

こつくりさんは最後の力を振り絞つて俺の首を絞める。

残念だな

俺が死ぬ前にお前が滅びるよ。

第17話：「 ijibuttsen、ありがとわ」

「翔！！」

そう言って光と真理と明奈が入ってきた。

「ヴァアアアアアアア」

皆はijibuttsenを見て驚く。

どうこう事になっているのか

やはり理解できていない様子だ。

「お前……な……」

光は焦げている本に目がいったのか

怒りのあまりに俺にあたる。

「何やつてんだよ」

そう言って俺の帆を殴る。

だつてこれしか方法はなかつたんだ。

いひしないといijibuttsenは……。

俺はそつにながらijibuttsenの方を見る。

もつ舌は流れ落ち、皿は飛び出で、口から血を吐いて髪抜け落ちた哀れなコックリさんの姿をただ……見ることしかできない。

「全部終わらせる条件だったろう？ 何で殺してんだよ」

何も答えない俺に光は涙を流しながら言つ。

「私……納得できなーよ」

明奈はそう言つて俺の方を見る。

真理も

だつて……。

そんな事いわれたつて

こつくりさんはもう死んじゃつたじゃないか。

本もこの通り焦げてカスになつてゐるし

今更こつくりんをしようだなんでもう遅い……

「あーこの紙、これこつくりんの紙じゃないか？」

そう言つてわざわざ泣いて俺にガンつけてた光が紙をひらつて皆に見せる

これ、わざわざこつくりさんが破つた一枚だ。

「もう一回ひっくりかえしてみる?」

そう言って出したのは明奈。

まだ可能性があるのならば……。

何かが変わるかもしれない。

もとほと言えば俺が言いだしたんだ。

ひるで逃げる訳にはいかない。

監禁ひりくわんを書いて鉛筆を持ち準備している。

「まじめよ、翔

真理にそつ言われ

涙を流しながら行く俺……。

ひりくわん

殺して置いてなんだけど

もう一度……

最後だけもう一度……

俺たちは鉛筆を強く握った。

田付が出てきて、紙もかすかだが光っている。

「ひくつさんはまだ生きている。

俺たちは息を吸って深呼吸した。

「ひくつさん、ひくつさん
……おこでください」

反応がない……

「ひくつさんは田もむのじろの状態だしな。

やつ想ひで「ツクリさん」が倒れている所を見た。

「ひくつさんが消えている。

え……？ いない？

「お、あいー、ひくつさんがいなー……」

俺は明奈達に声をかけた。

「俺達がこつくりさんを始めたから本の中のページに瞬間移動
したんじゃないのか？」

ページの中まで瞬間移動できるのかな。

瞬間移動

あの体で

あんなボロボロの体で……。

俺はそんな事を思つてたら何故か涙が出てきた。

「どうしたの?」

真理は俺を心配してくれる。

何故だか分からぬけれど涙が止まらないんだ。

「つ……続けて」

俺は震える声で囁く。

「いつかそれを呼び出さなければ……」。

俺は少し後悔していたんだ。

口づくことをあんな姿にされない。

「うひへつやさうひへつやさ……『たら“はい”の方向へ行つてく
ださこ』

光が真剣な顔をして囁く

すみ……

＞＞ズズズズズズズズズズ＜＜

鉛筆が動き出す

”ハイ”の方向へ行く

また完全に消えでしながた

俺はそこ思ふと心が落ちて着いた

俺たちがここくりさんで闇う前にここくりさんは

動き始めた

これでさいごだ

俺たちは体が反射的に動いた。

”これでさいご”

やう思ひと懸してようで嬉しいんだ。

いや

本當は悲しまなくちゃ いけない……。

だけど……。

「 うへへつせん、 セヨウナ 」

俺はいつもさんを涙を流していった。

本当は全部枚数終わらせたわけじゃないけど

終わり方がどうあれ最後までたどり着けたんだ……。

「 あ り が と う お わ ら せ て く れ て
あ ん な ま ね し て ご め ん 」

いつもさんは俺たちに謝つてくれた。

でも

俺は許せないよ。

いつもさんを……

でも、アリガトウ

俺もいつもさんに教えて貰つたこといっぱいあつたから……。

第1-8話：「戻った日常」

「ひくりさんが誤つてくれたせいで

僕たちは「ひくりさんに言ひ」は何もなくなつてしまつた。

俺たちは声をそろえて「ひくりさんに別れの言葉を告げた。

「ひくりさん…… わよひなら」

誰もアリガトウとは言わなかつた。

いや、ありがとうだなんて

言えなかつたんだ。

俺たちの大切な人を何人も殺しておいて。

”アリガトウ”

だなんて……。

「ひくりさん、ひくりさん…… お帰りになられるのであれば「
はい」の方向へ行かれてください」

鉛筆は動き出した

＾＾ズズズズズ＾＾

”はい”

終わった。

これで終わった。

これで本当にゲームが終わった。

おびえる生活をしなくてすむんだ。

俺たちはもう思つとホットした。

「おわったな……」

「うそ」

「なんか……あっけなかつたね

俺たちはブツブツと呟いていた。

すると

目の前が真っ暗になつた。

え・・・?

俺たちはどうなつたんだ?

真っ暗の中で誰かが叫んでいる。

「ひへりさんだ

「今までアリガトウ、本当にあつがとう」

俺は喋れない……。

ただ「ひへりさんのはづの葉を聞くだけ。

真つ暗闇の中で何故か「ひへりさんと一人だ。

光達は何処に行つたんだ?

「あんな事をして」めん――――――

「ひへりさんは俺に必死で言つてくれて――

もうこよ

許せないけど

もうこいから。

そう思つた瞬間

「ひへりさんは消えた。

そして築いたら血だつた……。

明奈達が居ない。

何で？

わざわざまで居たのに。

机の上に置いてあつた焦げた本もない。

「翔、何やつてんの掃除手伝つか、出かけるかにしなさい！」

姉がいつも通り俺に怒鳴りつける。

何で姉ちゃんがいるんだ？

つてか今日何月何日だよ！

カレンダーを見たら

”2006年 4月5日”

「わくわくさんを僕たちが始めた日……。

最初に戻っている。

それじゃ

「わくわくさんの本は

俺はそう思い小屋に猛ダッシュで走った。

何処を探しても本がない。

終わったんだ……。

そうなんだ

「ひくりさんは最初に戻してくれた。

あの世にいけたのかな?

俺はあの時みたいに本屋へ行つた。

俺は「ひくりさんの本ではなく別の本を読む。

恋愛の小説をあの時みたいに立ち読みしていた。

「翔一君!」

後ろから驚かしてきたのは俺の女友達「富本 明奈」(ミヤモト
アキナ)だった……。

あの時と同じ……驚かしてきた。

「何読んでるの?」

「恋愛小説」

そう言つて俺たち一人は大声で笑う。

「ひくりさん……やつと終わったな?」

俺は明奈に問いかけた。

明奈は不思議とビックリしたような表情で

「じつは……何の事?」

と囁いてくる。

え?

忘れたのか?

第1-9話：「3人の記憶が途絶えて」

「…」

俺が何度も言つても明奈は分からぬ表情をしてみせる。

何で……。

何で忘れてしまったんだよ。

嘘だろ？

だつてあんな

あんな事がおきてたのに。

もしかして

俺はふと不安感に襲われて真理と光を呼ぶよつに言つた。

何十分か後

光と真理が本屋へやつてきた。

「翔…！久しぶり」

そつと歌いながら言つ真理……。

俺はすぐに「…」とやんの事を言つてみる。

「あのセ、ミカツタよなー戻つて」

皆は不思議そうな表情をしてみせる。

何だよその表情

頷けよ……。

何で困ったような表情してんだよ。

「忘れたとか言わないよな、いつくつさん的事」

俺は3人を睨みつける。

あんな事があつて

それでもつて忘れたとか……。

そんなのつて……。

「何言つてんの? 翔びついたの? いつくつさんが何?」

明奈が馬鹿にするよひで。

「訳わからんねーよ、お前」

光も

真理も

皆忘れている。

何で俺だけ記憶を残した?

何で

♪♪♪フルルルルル……<<

俺の携帯電話に電話がかかってきた。

”非通知設定”

誰だろ?う?

こつくりさんじやないよな?

だって明奈達に電話は掛かってきてないし

俺は不安をかかえながら電話をとった。

「もしもし」

「翔君ですか? 今あなたの学校に居るので来てくれませんか?」

高い女の人の声だった。

俺は明奈達に事情を説明してから学校に向かった

そこに居たのは……。

長い黒い髪がとても眩しく

目が大きく背はそんなに高くない。

150センチくらいだらうか。

年齢は分からないが俺たちと一緒に暮らしだらうか。

「ひとにかくね」

女の子は高い声で挨拶をし礼をする。

この高い声何処かで聞いた事がある。

それにこの顔どこかで……

どこかで見たんだ。

「ここにちは」

俺も一応挨拶を返した。

頭の中が真っ白で誰だか分からぬ。

「私の事覚えてますか?」

女の子は寂しそうな顔で俺の表情を伺つ。

俺はもしかしてと思つて

「『Jリハ』くつせん?……な訳ないよな!」

言いかけたが誤魔化してしまつた。

だつてそんなハズないし

「私は、季黎^{キサ}と言います」

『Jリハ』寧に自分の名前を紹介してきた。

季黎?見覚えがない。

誰なんだ

一瞬『Jリハ』くつせんかと思つたが違つたよつだ。

「えつと俺、あなたのこと知らないんですけど……」

そういうと季黎さんは悲しい表情をして見せた。

え?

俺なんか言つたか?

でも、どうしても分からぬんだ

「私は『Jリハ』くつせんです……私の本名が季黎です」

え……。

「ひくりさんにも名前があったのか？」

あまりに突然の告白で俺は驚きを隠せなかつた。

だつて、あの……

つて、いつか何でひくりに会ふんだ？

でも俺はズット疑問に思つてゐた事があつたんだ。

「何で俺だけ」「ひくり」「季黎さんの記憶を残したんですか？」

「俺はつい」「ひくりさん」と言つてそいつになつたが慌てて言い直した。

もつ“ひくりさん”なんて呼べない。

本名をしつてしまつたから。

「あなたがこひくりさんを始め、終わらせてくれたから……
あなただけには私の事を覚えててほしかつたんです」

季黎さんは苦笑いをした。

でも

「終わらせたのは俺一人じゃないのに。

「終わらせたのは俺一人じゃない」

俺がそのまま俺の言葉をふりへつこつて

「あなたがあの時燃やしてくれなかつたらゲームは終わつてしまふ
んでした」

でも、終わりはせよつ、つて言つたのは俺じゃなこのこと……。

俺は季黎さんの顔を見たら田をそむけて考えた。

そうだよな。

皆あの最悪な事件ゲームの事を覚えてたら今後普通に生活していくいも
んな。

俺だけ季黎さんの事を覚えている。

だからあの時の事は一生忘れないで生活していく。

「記憶消しましょつか？あなたが心残りなのであれば……

私はあなたから今まで起こつた記憶を消します

え？

何だつて？

でも、そんな……。

季黎さんの思わぬ発言に俺はとまどつて躊躇しきれなかつた

第20話：「壊れることのない友情を誓つて」

記憶を消されたら

せっかく季黎さんと出合えたのに。

それに

「また」「つくりさんを始めるかも知れない」

そうだよ。

記憶を消されたらまた最初の時みたいに「つくりさんを始めるかも
しれない。

「大丈夫、あの時みたいに酷いことは起こらないから私は人間に戻
れた……

だからただの遊び半分で終わるはず。何かあつたら私が助けるから
だから何も苦しまないよう私があなたの記憶を消します」

そつ言つて俺の額に指を一本当てる……

ちゅうとまつて。

何で季黎さんは「つくりさんになつてたの？

記憶は消えるけどそれだけ聞かせて

「ちゅうとま……」

季黎さんは何か意味不明な呪文を田をつぶつて唱え始めた。

次の瞬間

目の前が真っ白になつた……。

そして気づいたら学校の校門の前だつた。

あれ？ 一体何でここに？

さつきまで明奈達と一緒に居たハズ……

「翔……！」

俺の名前を呼びながら走つて来るのは

明奈と光と真理。

「いきなり何処かに行くからビックリしたじやん

そう言つて3人は笑う

ああ……

飛び出したのは確かに覚えている

でも何で飛び出していくのかが分からぬ。

俺は何の為に飛び出して行つたんだ？

何か目的があつたはずなのに……

「俺何しにここに来たか忘れちゃった」

真顔で言つて俺に啞然とする3人。

明奈が俺にさつきの事を説明してくれた。

電話？

電話つて誰から？

着信履歴を見たが今日は誰からも掛かってきていない

意味分からぬー……

そう俺はこつくりさん（季瀬さん）と逢つていたことなんですが
り忘れていた。

「ま、軽い老化と言つ事でーもどるーぜーなんか飯でも食いに行こ
うよ……な？」

そつ言つて俺の肩を軽く叩く光。

軽い老化にしては……。

思い出せないのはナンデだ？

俺はその事は気にしない」とした。

「へりの悩んでも思ひ出さうとしても結果は同じ思い出せないから。

悩んでも無駄だと思つた。

そういって数日が過ぎー……。

春休みも終わり学校へと入つた。

だが……

こんな時期に転校生がやつてくるなんて思つてもいなかつた。

^ ^ ガラガラ…… ^ ^

担任が教室に入ってきた。

続いて転校生も入ってきた。

長い黒い髪がとても眩しく

目が大きく背は…… そんなに高くない。

150センチくらいだらつか。

「初めてまして…… 龍崎季黎と言います

お人形みたいな綺麗な声だつた。

俺はその女の子に見とれていた。

席がなんと俺の隣だつたのだ

「初めまして……翔君、仲良くしてね？」

え……？

なんでコイツ俺の名前しつてるんだ？

「季黎さん……えと、よひじく

俺は驚きを隠せなかつた。

隠せないなんて当たり前だ。

だって俺コイツの事知らないの……。

「何で俺の名前しつてんの？」

季黎さんが席に着いてから俺は聞いかけた。

「席……ってか名簿みたか？」

やつぱり季黎さんは俺に笑いかける。

季黎さんが転校ってきて一ヶ月が経つた。

今では光や真理や明奈もすっかり季黎さんと仲良しだ。

そつ……。

季黎さんは今までの事を全部知ったうえで俺たちに接してくれているなんて俺たち誰一人知らないー……。

俺は季黎さんに出会えてヨカッタ。

綺麗な表情を浮かべる人と友達になれてヨカッタ。

これも一つの運命だつたんだ。

ありがと季黎さん。

僕たちは一生壊ることのない友情を固く誓つた。

ありがとう

俺はキリを許せなかつたけど今ま許せゐるんだ

なんだと思ひつゝ

「かくさんの良い所を知つていけたから

あのまま終了しても何も変わっていなかつたら俺は許せなかつたと
り思つ

だけどな

今は「つくりさん」の事がスキだから

だから憎んでたこのキモチを解除します

今はお礼しか言えない

いつくらさんの事を俺達は忘れてしましたけれど

あの長いニュースにもなった事件の事を俺たちは忘れてしましたけれど

俺たちはこれからまた歩めるからいつくらさんと一緒に

今度は間違った方向じゃ無い方で

明るい未来と一緒に築いていこう

いや明るい未来と一緒に築いていけるんだ

そう信じてゐから

こつくじさん、こつくじさん

僕たちに本当の恐怖を教えてくれてアリガトウ

僕たちに本当の友情を見させてくれてアリガトウ

僕たちに本当の光を与えてくれてアリガトウ

アリガトウ

アリガトウ、こっくりさん

僕たちは決して忘れない

あのときの出来事

僕たちは決して忘れない

忘れやしない

本当は最初っから

「ひくりさんの事が好きだったのかもしねい

本題のナリをしつたからだよ

あつがといつね

あつがといつね

解釈・季黎さんといへるのつながり

何故季黎さんが「いつくさんになつてこたか」と云つて
季黎さんと前、本物の「いつくさん」を体験した。
だなび、いへるのを途中でやめてしまった。
途中で鉛筆から手を離してしまつたのだ。
そして、その本」と全部捨ててしまつて
と暴言を吐いたから
キツネの神はお怒りになつた。
そして、囁として季黎さんを本に閉じこめた。
「あなたはいけない事をいいました。囁として、この本が終わるま
でこの本に閉じこめます。
この本が全部終わればあなたを解放します。
それまで罪をつぐないなれ。

「ヒツ君を馬鹿にした罰です。

あなたがヒツ君になり、人間共に罰をあたえてでもいいので、終わらせるように努力しなさい」

と……

そして季黎さんは終わらせてくれる人を何年も待ち続けた。

終わらせてくれたのが翔達だった。

そして、その本の題名が翔の家にあった「ヒツ君」だったのだ。

だから、古くから置いてあつた。

キツネの神はヒツ君に新たな力……。

瞬間移動、人を殺せる力などを授けて、季黎さんをずっと天から見守っていたと聞く。

季黎さんのその後

季黎さんはヒツ君にされた後、一度ヒツ君を馬鹿にすることはなかった。

ただ、ヒツ君と前向きに向き合ってきた。

季黎さんは人間に戻つた後、神社にお参りに行つた。

キツネの神様の神社に……。

それが季黎さんが本を捨ててしまつた場所。

季黎さんは誤つた。

「今までスミマセンでした」

と……

キツネの神は笑いながら微笑んでくれたと聞く。

何故翔の家に本があつたかといつと……

翔の家の住人がこつくりさんの本をひらつて始めた

そして恐ろしくなつたので、小屋に捨てて自殺したらしい……

それが季黎さんが言つていた

「自殺したよ……」

だつたと考えられる。

解説・季節をさとりへつたのつながり（後書き）

本当に「ひくりさん」を読んで下さってありがとうございました。本当に嬉しいです
これからも、いろいろな小説を書いていくつもりなので、応援宜しくお願い致します。w

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6285a/>

リアル・・・こっくりさん

2010年10月28日05時38分発行